

道徳教育総合支援事業の報告

弥富市立桜小学校

1 道徳教育に関する改善状況の概要

昨年度末、高学年児童・保護者を対象に行った「学校づくりアンケート（学校評価）」では、「いじめのない学校」と回答した児童・保護者は8割程度であり、「子どもに思いやりの心が育っている」と回答した保護者も8割程度であった。児童の様子を見てみると、相手の気持ちを考えない短絡的な言葉を発したり、自分の思いをうまく伝えられず、感情のすれ違いによる些細ないさかいを起こしたりしていた。また、安易に相手が傷つくような言葉を発するなど、自分の発言が周囲に与える影響について考えることができない児童が少なからず存在している。

そこで、「自他のよさを認め、よりよい人間関係を築いていくことのできる児童の育成」というテーマを設定し、重点項目を「思いやりの心」として、道徳の時間の充実を図るための研究を進めることとした。

2 研究の内容

(1) 特色ある道徳教育について

① 道徳的実践力を育成していくための授業展開の工夫

ア ユニバーサルデザインを取り入れた授業実践

イ 児童の多様な考え方を引き出し、活発に意見交流ができる場の工夫

② 道徳的価値が意識できる環境づくり

ア 互いに認め合い、共に学び合う場の設定

イ 集団を啓発していく学級・校内掲示の工夫

③ 地域との連携

ア ゲストティーチャー、地域人材を活用した道徳の時間の工夫

イ 道徳性の育成を図る地域に根ざした道徳教育の場の設定

(2) 道徳教育用教材活用について

① 教材の活用・所有実態

弥富市では、道徳教育用教材として、愛知県教育振興会発行の「明るい心」を使用。桜小学校では、道徳教育の要となる「道徳の時間」の指導方法について、読み物資料を用いた指導方法の研究に取り組んできた。

② 活用する道徳教育用教材

「明るい心」愛知県教育振興会発行

③ 教材の活用計画

桜小学校では、道徳の時間での読み物資料を用いた指導方法の研究に取り組んできた。平成 25 年度道徳教育の重点目標を「思いやりの心」の育成とし、目標達成のため、道徳教育用教材に加えて、さらに新たな読み物資料を開発し、その指導方法について研究を進めた。

研究を進めるにあたっては、年 5 回にわたり外部講師を招き、読み物資料の分析、活用の仕方や授業展開の方法、発問の工夫などの指導案作成等についての校内研修を実施した。

3 研究の実施経過

4 / 15 道徳教育を進めていくための全体計画

4 / 18 三部会による研究の方向性の検討

7 / 11 「道徳的実践力を育むための授業展開の工夫」

校内研修会（第1回）

講師 東海市立加木屋中学校長 前田治先生

7 / 29 8 / 26 11 / 6 2 / 10 校内研修会

（全5回実施）

8 / 7 「学級集団づくり」校内研修会

講師 名城大学講師 杉村秀充先生

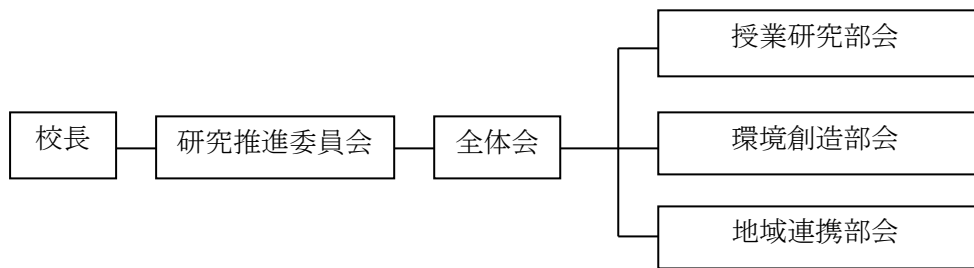
10 / 21 「ユニバーサルデザインを取り入れた授業づくり、

学級づくり」 校内研修会（第1回）

講師 海部教育事務所特別支援教育指導員 長谷川修三先生



4 研究の組織



5 研究の成果

(1) 道徳的実践力を育成していくための授業展開の工夫

① 読み物資料の状況把握

教師による範読は、児童の思考の速さに合わせ、イメージしやすいようにゆっくり読むが、その際に場面絵を効果的に提示していくことは有効であった。また、発達段階を考慮して、挿絵や紙芝居で児童の想像力を補うことは有効であった。状況をしっかり把握させておくことが、児童の多様な考え方を引き出すうえで重要である。



② 基本発問

最初の発問は、書いてあることを答えさせる簡単なもので、発言しやすい雰囲気をつくるのが大切である。各発問の前に場面状況を説明し、児童が考えやすいようにすることも大切である。

しかし、中心発問でしっかり考える時間を確保するためにはできるだけ時間を短縮する必要がある。中心発問で考えを深めさせたい主人公の気持ちや道徳的価値に関するキーワードをしっかり押さえることができる発問が重要である。また、児童になじみのない言葉の意味やイメージを導入の中で伝え、資料の中に入れていけるようにすることで時間短縮をすることができる。

③ 中心発問

中心発問では、多様な考え方や感じ方を出し合うだけでは十分だとは言えない。中心発問で予想される児童の反応をできるだけたくさん書き出し、価値を類型化して臨むことが大切である。また、その中のどこを問えば、児童の考えを深めていくことができるかを事前に考えて臨むことが大切である。出された多様な考え方をもとに、比べ合い、意味の違いを確認したり、児童の一つの意見を取り上げ、どう思うか問い直したりすることが効果的である。その際、板書に児童名のマグネットを貼ることで、児童の考えの変容を見ることもできる。



中心発問でしっかり議論し児童の考えを深めることができれば、道徳的価値の自覚はある程度達成されていると考えてよい。児童は実際に経験したことをもとに発言しているので、無理に生活に戻す必要はない。

④ 終末

ねらいとする道徳的価値をまとめたり、温めたりして今後につなげる段階。余韻を残して終わりたい。教師の説話や感想を書き発表するなどが考えられるが、授業内容に関する「詩」「CD」「VTR」「画像」等が効果的であった。また、ゲストティチャーによる説話も効果的であった。

(2) 心の悩みに関するアンケート結果から

どの学年、どの学級においても、1学期に実施したアンケート結果（項目：いやなことをされてことがありますか。）よりも3学期のアンケート結果の方がよくなったことから、道徳の時間を中心に読み物資料を活用して道徳教育の充実に努めていったことが成果となって表れてきたと思われる。